



Title	臨床哲学自閉症分科会ワーキングペーパー
Author(s)	植田, 有策; 大北, 全俊; 小菅, 雅行
Citation	臨床哲学. 2011, 12, p. 92-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6112
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

臨床哲学自閉症分科会ワーキングペーパー

植田有策 大北全俊 小菅雅行

1. はじめに

当ワーキングペーパーの導入として、自閉症分科会ができるまで、ならびにその後の経緯について簡単に説明させていただきたい。そもそものきっかけは、金沢大学の研究プロジェクト「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」の研究員である竹内氏にプロジェクトへの協力を依頼されたことである。「自閉症にやさしい社会」プロジェクトは「自閉症コンセンサス会議」「自閉症サイエンスショップ」「自閉症サイエンスカフェ」というコミュニケーション活動の実施を模索していた。私は以前より「大阪大学サイエンスショップ」という組織のスタッフとして活動しており、またコンセンサス会議のような科学技術コミュニケーション活動の興味を持っていたことから、当プロジェクトへの協力を快諾させていただいた。

自閉症にかかわる活動を行うにしても、私一人の力では限界がある。そこで、同様の関心を持つ臨床哲学研究室のメンバーの協力を得るために、2010年度初頭に自閉症分科会の設立を提案させていただいた。以上が自閉症分科会成立の経緯である。

その後、「自閉症にやさしい社会」プロジェクトとの関わりは、金沢大学のプロジェクト本体の活動との兼ね合いもあり、当初想定していたコミュニケーション活動への協力、という方向から、自閉症についての哲学的研究を行う、という方向にシフトしていった。自閉症分科会の活動としては、当初は自閉症について何の知識の持たないメンバーがまず自閉症について学ぶため、自閉症に関する書籍を分担して読み、その内容を発表するという形式をとった。分科会の活動の中で自閉症という障害について知るなかで、いくつかの気づきがあった。それを文章の形でまとめようとする試みが、当ワーキングペーパーである。「哲学的研究」と呼ぶには全く足りない不十分なものにすぎないが、ご一読いただければ幸いである。

(小菅雅行)

2. 分科会を通して話し合われたこと

① 「自閉症にやさしくない社会」とは何か？

「自閉症にやさしい社会」、これは金沢大学のプロジェクトの名称である。この名称を、我々が違和感なく受け取ることができる、ということ自体が、我々が持っている一つの共通認識を明るみにする。すなわち、いま我々が住んでいるこの社会は、「自閉症にやさしくない社会」である、ということ、我々は暗に認めているのだ。この「自閉症にやさしくない社会」とは一体何であろうか？

まず、我々がどのような人々を自閉症と判定するのか、その基準に立ち返ってみよう。アメリカ精神医学会で定義している精神障害の基準、DSM-IVによると、「対人的相互反応における質的な障害」「意志伝達の質的な障害」「行動、興味および活動の限定され、反復的で常同的な様式」のうち、一定数以上のものがみられる場合、自閉症と診断される。言い換えると、相手にどう反応するか、人に意思をうまく伝えられるかどうか、変わった行動をとるかかどうか、という基準によって、自閉症であるか否かは判定される。

裏をかえてみれば、自閉症ではない「健常者」とは、人とのコミュニケーションが普通にできて、変わった行動は取らない人のことである。これ等の基準を達成するか否かで線引きするということは、我々が社会の成員に対して、コミュニケーションを「普通に」取ることができる能力を「正会員」への加入条件として課しているようなものである。我々の社会において、コミュニケーションを「普通に」取ることがいかに重視されているか、ということが垣間見える。

このような線引きを、我々はどのように評価すればよいのだろうか？このような線引きが、一概に良いとも悪いともいうことはできないだろう。一見すると、このような線引きは残酷なもののようにも思える。しかし、組織化された集団を単位として生活することが必須となっているこの社会では、このような線引きは理にかなっているともいえる。

しかし、このような線引きは潜在的に、普通である我々の属す側が優位で、障害を持つ彼らの側が劣位である、という階層構造を孕んでいるといえる。そしてそれゆえ、彼らを「こちら側」に引っ張り込むことに努力が注がれる。自閉症児に対する「教育」という文脈で語られることは、ほぼすべてが、「コミュニケーションをとれるようにするための教育」である。(もっとも、コミュニケーションがとれないままではその他の教育もできないので、これは必然のことであるともいえるが。) すなわち、コミュニケーションがとれることを

優先項目として、それが彼らにひたすら叩き込まれる。

しかし、このことは、彼らにとってどのような意味を持つのだろうか？場合によっては、これが人間の多様性の範囲を狭めてしまう可能性もある。すなわち、普通のコミュニケーション、特に言語によるコミュニケーションが取れるようにするための教育によって、生来の特殊性が矯正され、失われてしまう状況がありうる。ある自閉症児の事例で、幼いころは非常に突出した絵画の才能を持っていたにもかかわらず、教育によって言語使用ができるようになるに連れ、絵を書けなくなっていった、というものがある。教育を通じて社会に適応するように標準化されることで、多様性が失われるのだ。

近年、環境問題などの文脈で、「生物多様性」という言葉がよく現れる。この「生物多様性」という言葉は、単に種の多様性のみを指すわけではなく、同種の生物の多様性をも指す。生物多様性の維持が何らかの価値を持つものとして認められているのであれば、我々人間の多様性を維持することにも、何らかの価値を認められてよいはずである。しかし、この標準化された社会のありようは、人間の多様性を削減する方向に働いているともいえる。

コミュニケーションをとれることが優先課題となるこの社会は、それゆえにそれを苦手とする自閉症者にとっては「やさしくない」。しかしそのことのみならず、彼らを「こちら」に引っ張りこもうとする社会のあり方もまた、やさしくなさのひとつの要素なのではないだろうか。

(小菅雅行)

② 自閉症というレッテルを貼るということ

自閉症という概念ができてから、まだ半世紀ほどしか経ってはいない。自閉症者と健常者という線引きは、つい最近現れた生まれたものに過ぎない。特定の集団の人々に対して、自閉症というレッテルを貼り、「我々」とは違う存在だ、と切り離すこと。このことには、どのような意味があるのだろうか？

ここで、私自身の体験を振り返ってみる。2010年4月に自閉症分科会を立ち上げてより、自閉症についての文献を読む機会が増えたことで、私自身の人に対する見方にも多少の変化が生じた。すなわち、今まではそのようには意識していなかったが、自分の周りの人の中で、自閉症者に見られる特質がみられるような特定の人に対して、「この人はひょっとすると自閉症かあるいはその傾向があるのではないだろうか」という見方をするように

なったのである。さすがに当人に対して聞いてみるようなことはしていないが、心の中で「レッテル貼り」をしてしまっている。

この「レッテル貼り」によって、私のその人に対する見方は変わった。それまではその人は性格上に問題がある人だと考えており、その人を敬遠してある意味嫌ってもいたのであるが、レッテル貼りをすることによって、「許せる」という感情が沸いたのである。この感情の変化を改めて振り返ってみる。第一に、これは非常に失礼なことである。「許せる」というのは相手を下に見たような感情である。レッテル貼りをすることで、私は自閉症者かもしれない相手を、ある意味で憐れみの対象として見下したわけである。また、私はその人を「性格が悪い」人間だと思っていたのであるが、「悪さ」を障害に帰属させることで、その人を「悪さ」から解放した。障害によって一種の責任転嫁を行っているのであるが、このようなことは正当であるのか、疑問が残る。また、その人の過去の私に対する態度などを振り返ったとき、あのことは私に対する悪意や嫌悪感に基づいてなされたのではなく、その人に自閉症的傾向があるから、そのような振る舞いになったのだ、と再解釈することで、自分に悪意が向けられているのではないとか、嫌われているのではないか、という不安感からも開放された。総合すると、レッテル貼りによって、わたしは「ほっとした」のである。

以上の話は私個人の体験に基づいた話であるが、このようなことは一般に拡張される可能性もある。すなわち、この線引き自体が、自閉症者のためのみならず、健常者（とりわけ家族など、自閉症者の周りに居る人々）にとっても、自らのその人に対する感情を和らげ、不安感から開放される効果をもたらしているのではないだろうか。

自閉症を障害と認識し、線引きをすることは、彼らの「つらさ」「生きにくさ」を理解し、彼らを支えるために重要な役割を果たしているということはいうまでもない。しかし一方で、自閉症者のためのみならず、我々健常者にとっての精神衛生的な意味合いからしても、もたらす効果は無視できない。その意味では、線引きによって我々もまた恩恵にあずかっている。もちろん、我々のためだから、とって線引き自体が悪いというわけではないが、そういった側面もあるということを確認しておく必要もあるだろう。

(小菅雅行)

③ 「本人のため」は欺瞞？

自閉症という分類自体が困難な事柄に関して、特に一般化を目的とするわけではなく、わずかしかない私の個人的な支援学校や作業所での経験を思い出しつつ、ここにひそむコミュニケーションの問題を引き出したい。

それは「そこにあるハサミをとって」という瑣末な日常のコミュニケーションから、「役所に投票に行く」というような社会的行為にいたるまで、自分と目の前の自閉症とされる人が、どう動き、何を口に出すかということが、文字通り眼前の問題としてその都度立ち上がる、きわめて順調にいかない体験であった。

例えば作業所での一コマを思い出してみると、靴を履き替えてもらうという、普段であれば問題にもならない問題が、困難として立ちはだかることがあった（何度も）。こんなときしばしば、自分の思い通りに目の前の人動いてほしいから、このような指示を出しているのではないかと自省することがあった（そしてなぜ私はこの人に靴をはいてほしかったのだろうか。彼がなすべしとされる次の予定が滞ったところで、そのときの私が困ることでもなかっただろう）。しかし、同時にこのように「靴を履き替えて」という誘導それ自体が支援となることなしに、どのようにこの人は日々を暮らすことができるのだろうか、とも考えずにはいられなかった。だが「考えずにはいられない」というには、日々の暮らしというのは、あまりにもゴタゴタしすぎているようにも思えた。

誰かがフォローしなければ暮らしていくのが難しい人を、しかし一から十まで面倒をみるとなると、その人の意志を、その人が本当にやりたいことを、その人なりの考え方を無視しているのではないかと、思えてくる。読書感想文を無理やり書かせるような、生き方、考え方の押し付けがましきになるのではないかと、いうふうに。はたして「本人のため」という大義をもってなされる諸々のコミュニケーションは、実のところおせっかいになっていくのだろうか。

別の角度から考えてみよう。程度や質的な差異はさまざまだろうが、自閉症の人たちと順調なコミュニケーションをかわすことは難しい。例えばその中には、自傷行為をくりかえす人たちがいるが、電車の中、何の知識も持たない人の前でそのような行為がなされれば、それだけで何らかの線引きをしようとするような反応が出ることは、起こりうることだ。そこでもう関わりが遮断され、こちら側とそれ以外という構図ができあがる。疎外されたこの人と、あらためてコミュニケーションをとるためにはこの人を理解する必要があ

る。事実、日常的に自閉症の人と接している人たちは、このような自傷行為を目の前にして拒否反応を示すこともないのだが、ここでいう「理解する」とは一体なんなのだろう。自閉症についての知識的な理解が、役に立たないとはいわないまでも、それだけでコミュニケーションをすんなり容易にするわけではないということはいえる。そして日常的に接していても、コミュニケーションがすんなりいくわけではない。実際よほど慣れている人でも、一度固まってしまった自閉症の人を、再び動き始めさせることは相当骨が折れることだろう。だが、電車の中でたまたま接するだけの人たちと、少なくとも拒絶をあらわにしない日常的に接している人たちとの自閉症の人たちを理解する（自閉症について理解するのではなく）ありかたの違いというのは、十分に考えられてこなかったかもしれない。特に答えが用意できるわけではないが、ここで「理解する」ことによって達成されるコミュニケーションは、いわゆる「健常者」がふだん取り交わすものとは異なる、差異を含んだコミュニケーションということになる。そしてこの差異は、それを理解しても順調なコミュニケーションを根本的に勝ち取ることは難しいであろうし、そもそも理解することを不可能にしている差異ということになるはずだ。そして肝心なのは、その差異を前提にしつつも、そこに執着しないことではないかと思う。

ワイトゲンシュタインが『哲学探究』において、不自然なコミュニケーションの卓抜な例を挙げている。「ここで待っていてくれ」といわれたときの「ここ」とはどこか、というものだ。ある境界を引いてみたとして、「ここ」とはその内部か、そして境界自身を含むのか、またその「境界」とは、何と何の間の境界によって示されるのか、境界と境界でないものの境界は…など*。われわれは、このような言葉の用い方の細かい規則を、その細部にわたって検討することなしに、コミュニケーションをとることができる。私たちが、滞りないコミュニケーションの過程で飛び越えてしまったものは、注意深く解きほいしていくにはあまりにも複雑になりすぎているものなのか、それともそこで支配している規則は、自閉症の人たちが考える規則と決定的に異なるものなのか、それさえも知る手がかりがないというのが、ここでいう差異である。もっともわれわれがいかなるコミュニケーション回路を経ているのかを解明することが、コミュニケーションを可能にするわけではないだろう。このことは自閉症に関する知識的理解がそうであると述べたのと同様であるかどうかはわからない（また容易なコミュニケーションを目指すことを素朴に賛成したいわけでもない。この点は、本ワーキングペーパーで小菅が述べる懸念のとおりである）。いずれにしても、ワイトゲンシュタインの例に重ねて言わせてもらえば、違いということは、

細部にこだわってどこまでも細分化していく方向とともに、一挙に飛び越えてしまうという方向があるのだろう。

だから本人のためというのが「おせっかい」だということもなかなかいえないはずである。健常者による介添えや矯正を、自閉症の人が拒んでいると考えてしまうのもまた、自分たちの理解の範疇への押し込めか、みずから関わりを遮断していることと結果的には変わらない。「おせっかいになるから」といって介入をひかえるのも、理解があるように見える反面、境界に固執した態度に似てくることもある。自閉症の人が、あえて自ら自閉症患者らしくふる舞うことで安定を得る、という話もあるとおり、その症状を苦しむというより、その症状とともに生きるということもある。この話は、自閉症者の自閉症者的な行為を矯正するのは野暮だというふうにはまず受け取れることもできるが、自閉症者が周囲の人を含んだ環境との調和を獲得するために凝らした工夫だと考えることもできる。いまだ比喩の域を出ないが、「おせっかい」にもそのように、境界にあくまでもこだわるのではなく、それを操作したり、浸透させたりするような次元があるのではないだろうか、というあたりがここでの結論である。

(植田有策)

*Ludwig Wittgenstein: *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell, 1953/1958, p419.

3. 今後の展望

① 現在の分科会の形態について

本年度の分科会は、「対話コンポ班」(中岡・本間)「高齢ケア分科会」(浜渦)そしてこの「自閉症班」の三つの班から成り立っている(いずれも通称)。いずれの班も参加者によるこれまでの研究および活動が背景となって成立したもので、この「自閉症班」も小菅が金沢大学の研究プロジェクト「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」に参画していたことがその下敷きとなっている。メンバーは時に増減はあったが、基本的には植田、大北、小菅の三名である。植田は実習先での「自閉症児」との出会いについて考えるということがこの班への参加のモチベーションであったが、私(大北)についていえば、

「分科会に教員がひとり参加する」という教務的な事情により参加することとなったのであり、自閉症に関係する問題への接点は特になかった。いずれにしても、植田・大北は現時点では自閉症に関する研究および活動に従事しているということではなく、一人小菅のみが主体的に現在進行形で研究に接点を持つものであった。よって、自閉症班は、自閉症班として独自の研究や活動を遂行するというのではなく、小菅の研究・活動のいわば「ブレーストーミング」の場であった。

② 今後の形態として

本年度の自閉症班は、以上のように個人研究のブレーストーミングの場として機能したわけであるが、今後もその形態を続けるか否かは不透明である。今後のあり方としては可能性としては三つあると思われる。一つは本年度と同様に個人的な研究のブレーストーミングの場として存続すること、あるいは「自閉症班」として組織的な研究・活動を開始すること、そして分科会としての自閉症班を本年度限りとすること、以上である。

自閉症班の今後を考えることは、「分科会とは何か」ということについて考えることでもあるだろう。

「分科会とは何か」ということについては、おそらくこれまで臨床哲学の試みが開始されてから常に話し合い、考えられてきたことであると思われる。それはそもそも「臨床哲学とは何か」という問いにつながる契機でもあるだろう。あるいはむしろ、「分科会として行われていることは何か」ということについて反省することが、「臨床哲学はどうなっているのか」ということを認識する契機となるというほうが正確かもしれない。

もっとも、今回の自閉症班のワーキングペーパーで、他の、そしてこれまでの分科会および臨床哲学について認識するということは困難であるだろうし、またそれを意図してもない。あくまで「自閉症班」に限定し、今後の形態を考えるにとどめるが、しかしながらそれはおのずと「臨床哲学」についての一連の問いを喚起することになるのではないかと考えている。

本年度の振り返りとして、個人研究のブレーストーミングの場という形態は明確であり、それなりに分科会として機能したのではないかと考える。そもそもいわゆる「研究会」という場は、個人的な研究の発表に基づく参加者相互の意見交換の場であり、それと違いはない。小菅が中心的に投げかけた自閉症を取り巻く状況について、参加メンバーが思いつくことを話し合い、それが小菅の個人的な研究に生かされたか否か、あるいは、他のメ

ンバーのそれぞれの関心事と思考（私の場合は HIV 感染症を中心とする病をめぐる社会的な事象の分析）の一助となったかということであり、分科会として組織的な動きがなされたとは言い難い。

来年度も、もし同じく小菅が自閉症に関係する研究を継続するのであれば、同様の形態での分科会は可能であるし、それなりに意義のあるものと考えている。

しかし、組織的な研究および活動を実施するとなると、事情はまったく異なるものと思われる。そもそも小菅も正確には「個人的な研究」ではなく、他のかなり大規模な研究班の一部として参画しており、全く個人的に実施しているわけではない。小菅が参画している研究班については、すでに小菅自身によって紹介されているので繰り返すは避けるが、すでにその研究班の研究および活動の母体があって、それに小菅が参画し、それからブレーストーミングの場としてこの分科会があるという構図になっている。分科会として組織的に研究および活動を開始するという事は、小菅が参画している研究班と連動する研究班との関係を密にしながら立ちあげるか、全く新たに自閉症に接する研究を組織的に開始するか、いずれかとなる。前者の場合は、母体となる研究班との連携を図りながら、臨床哲学とは何か、そしてどういったスタンスでコミットするのか、母体となる研究班に寄与しうるものは何かといったことが問われることになるだろう。後者の場合は、全く新たに「自閉症」のフィールドに関わっていくということを試みることになるだろう。なにをもって「自閉症のフィールド」と言えるかは議論の分かれるところではあるだろうが、自閉症と診断された人をはじめとして、その家族や医療・福祉・教育など様々な立場で携わっている人との連携を図ることは不可欠であるだろう。そうになると、もはや臨床哲学内部の組織で閉じているということは想像しがたく、学問領域のみならず大学外との連携を視野に入れた研究・活動を開始する用意が必要となる。

つまり、分科会として組織的に自閉症の問題に関与する道を選択する場合、必然的にその組織は分科会の内部だけで閉じるということは難しい。極言すれば、いわゆる「分科会」として組織的にフィールドに関わるということは原理的に困難だということになる。もはや月に1回か2回ほど開催される分科会では追いつかず、全く別個の研究班の立ち上げを余儀なくされるだろう。実際、他の分科会の実態はそのような状況になっているものと思われる。

そうであるとすれば、現状の「分科会」という形態の範囲内で動かならば、「ブレーストーミングの場」という形態以上のものはあり得ないのではないかと考えられる。そし

て、それが各参加者のそれぞれの研究・活動の「スターター」としての役割を終えたのであれば、それでその分科会は役割を終えたと考えたほうがいいかもしれない。

臨床哲学に関わるそれぞれの研究の進捗状況によって、すべてが同じような組織形態になじむということはないと思われる。分科会のあり方もそのそれぞれの研究会の進捗によってそれぞれに異なっているということのほうが理にかなっているだろう。今回の自閉症班のように個人的な研究の「スターター」あるいは「ブレインストーミング」の場としての分科会というあり方も、萌芽的な研究を生み出す場として、また異なる関心を持つ者同士が相互に刺激を与える場として、臨床哲学の研究を遂行するためには実は非常に重要な場なのではないかと思われる。もし可能であれば、このような萌芽的な個人研究をも視野に入れた「スターター」あるいは「ブレインストーミング」の場が、より多くの異なる関心を持つ参加者が集う場でなされる、そういう場があることがより望ましいのではないかと考える。

(大北全俊)

参考文献

- 綾屋 紗月・熊谷 晋一郎『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつなぐたい』、医学書院、2008年
- 木村敏・村上靖彦『統合失調症と自閉症の現象学』（『現代思想』(vol.38-12) 所収)、青土社、2010年
- 村上靖彦『自閉症の現象学』、勁草書房、2008年
- L. ウィング『自閉症スペクトル 親と専門家のためのガイドブック』、久保絃章・佐々木正美・清水康夫訳、東京書籍、1998年
- S. バロン＝コーエン・P. ボルトン『自閉症入門 親のためのガイドブック』、久保絃章・古野晋一郎・内山登紀夫訳、中央法規出版、1997年
- T. グランディン『自閉症の才能開発 自閉症と天才をつなぐ環』、カニングハム久子訳、学習研究社、1997年